

安全運転管理ノススメ

若年ドライバーと高齢ドライバー向け事故防止

SOMPORISクママネジメント株式会社
シニアコンサルタント

落合 律

はじめに

春になりました。桜の花が一斉に咲き、冬眠中の生き物たちが目を覚ますこの季節、心が弾んで、新しいことにチャレンジしようという気持ちになりますね。さて、今月は新人社員などの若年ドライバーと近年増加している高齢ドライバー向けの事故防止について紹介します。

若年ドライバーの事故要因

4月に入り、新人社員を迎え入れられた会社が多いのではないでしょう

うか。そうなると思いの種は、新人社員に業務で社有車を使用させ、早速事故を起こすのではないかということ。安全運転管理者の皆さまの悩みは尽きません。

実際、年代別に事故件数を比較しますと、20歳代の若年ドライバーの事故は他の年代に比較して多いことがわかります(図)。また、若年ドライバーの主な事故要因では、まず「安全不確認」「脇見運転」「漫然運転」といった「交通安全に関する知識・意識の低さ」が挙げられ、次いで「運転操作不適」に示される「運転技術の未熟さ」となっています。そのため若年ドライバー向けの事故防止に

「知識」「意識」「技術」の習得について

まず「知識」「意識」面については、社内で「交通安全講習会」を開催することが効果的です。若年ドライバーの大半は、自動車の運転経験が浅いこともあり、業務で自動車を運転することの責任の重さを認識できていないケースが多いようです。そのため若年ドライバー向けの交通安全教育では、社有車を運転す

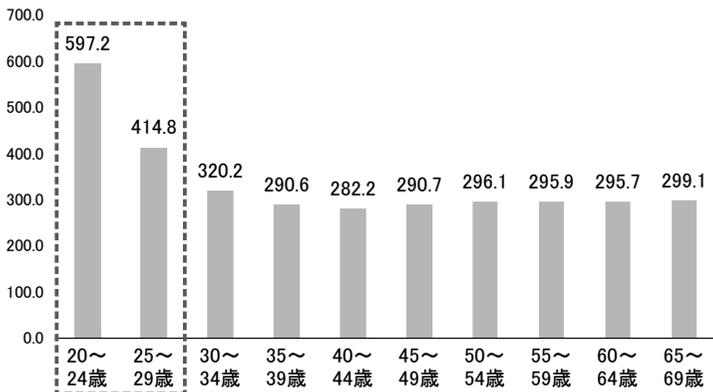
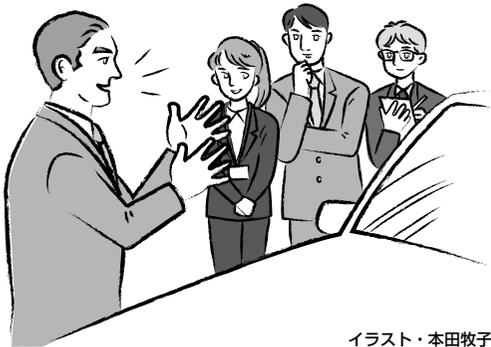


図 原付以上運転者(第1当事者、対象:20歳から69歳)の免許保有者10万人当たり交通事故件数
(出典:警察庁「令和4年中の交通事故の発生状況」をもとに筆者作成)

教習所での実技指導が効果的



イラスト・本田牧子

② 社内の交通事故発生状況と事故の特徴を説明し、どのような特徴や問題点があるかを理解させます。

④ 危険予測訓練
交通場面に潜む様々な危険とその危険を回避するための運転方法などについて指導します。

⑤ 若年ドライバーの特性
若年ドライバーの事故が占める比率が他の年齢層に比べて高いこと、その原因はスピードの出し過ぎや攻撃的で協調性に欠けるといった運転態度にあることを理解させます。

次に「技術」面ですが、自動車教習所の活用による実技指導が効果的です。若年ドライバーは、ペーパードラ

高年齢ドライバーに向けた事故防止について
近年、高齢ドライバーは増え続け、介護施設等における送迎業務などでも高齢ドライバーが活躍するようになってきました。ここで注意すべき点は、誰でも年をとれば、「動作の敏捷性が失われる」「無理がきかず疲労しやすくなる」など様々な面で身体機能が低下することです。これは交通安全で大きな支障となることがあります。そこで、身体機能の低下に関する具体的な例とその対策を紹介していきますので、これらについて高齢ドライ

① 交通安全に対する会社の姿勢
社内の交通事故防止のための施策や活動を示しながら、会社の交通安全に対する取組姿勢を説明します。

③ 交通事故と運転者や企業の責任
交通事故は、単に運転者自身の責任にとどまらず会社にも責任が及ぶことや、会社の信用やイメージの低下にもつながり、会社は大きな損失を被ることを理解させます。また、交通事故が発生した際に運転者がとらなければならない措置についても説明します。

イバーの方、あるいは、ある程度運転ができていても実際に社有車を運転することに不安を感じている方も多いようです。そのため、実車教育として自動車教習所の教官などの専門家から安全運転の実技指導を受け、これから運転をする上で感じている不安を軽減することが有効です。運転に不安のない方であっても、安全運転スキルや運転する際の注意点について改めて気づかせてもらえることもあります。

パーに自覚を促すようにしましょう。
(1) 視覚能力の低下

【例】

「静止視力、動体視力の低下」「暗順応、明順応に長時間を要する」「遠くのものが見にくくなる」「ヘッドライトを眩しく感じる」「視野が狭小化する」など

【対策】

- ① 夜間や雨天時の走行、トンネル通行時などでは十分速度を落とす。
- ② ヘッドライトが眩しいと感じたら直視せず、少し視線をそらして走行する。
- ③ 見え方に不安を感じたら眼科を受診する。

- (2) 自己中心的な運転傾向

【例】

「過去の経験に頼り、安全確認が形だけになる」

【対策】

- ① 交通ルールの改正など、常に新しい出来事に興味を持つ。
- ② 「交差点を横切る車はないだろう」「人が飛び出さないだろう」といった、自分の都合の良い思い込みによる「だろっ運転」をしない。

「だろっ運転」は交通事故で最も多い要因です。「いつも人や車が通らないから大丈夫だろう」という勝手な思い込みではなく、「人が飛び出してくるかもしれない」「車がやっってくるかもしれない」といった、危険を予測する「かもしれない運転」を心がけさせましょう。また、安全運転の基本ですが、どんな場面でも、危険に対応できるように、速度を落とす、周囲との間隔を十分に確保するなど心にゆとりを持った運転をするように指導してください。

- (3) 運動機能の低下

【例】

「長時間の運転に集中できなくなる」「一旦疲れると回復までに時間がかかる」「危険の発見や回避が遅れがちになる」「筋肉の衰えにより、側方や後方の安全確認に身体的な負荷が大きくなる」

【対策】

- ① 疲れを感じたら無理をせずに車を停車させて休息する。
- ② 狭い路地や歩行者等が多いなど、危険な場所は十分速度を落とすとして走行する。

- ③ 安全確認は必要に応じて降車して行う。

なお、運動機能の低下を防ぐために、日頃から適度な運動を行うことも有効です。

- (4) 加齢による生活習慣病の罹患率の上昇

一般的に加齢とともに生活習慣病（糖尿病、高血圧、高脂血症など）に罹患する割合が高くなります。これらはドライバーが突然意識を失って物や歩行者に衝突するといった、事故を引き起こすおそれのある「脳血管疾患」「心疾患」などの病気の原因となります。高齢ドライバーへは、定期的に健康診断を受診し、生活習慣にも気を配るように指導しましょう。

おわりに

今回は、会社の事故削減に向け、特に力を入れていた「若年ドライバーと高齢ドライバー向け事故防止」についてご紹介しました。職場の皆さま方の事故防止活動にお役に立てれば幸いです。

(おちあい・りつ)